



1926(大正15)年
音楽村(東京高等音楽学院)建設地**

幻の国立大学町音楽村 国立音楽大学創立の頃

染谷 周子

1926(大正15)年1月、帝国ホテルで「東京高等音楽学院」(現・国立音楽大学)の創立が発表された。発表後、箱根土地株式会社(現・プリンスホテル)代表の堤康次郎からの申し出により、国立(当時・北多摩郡谷保村)に学校建設を決めた。4月10日に実施された第1回の入学試験、19日の開校式及び授業は、箱根土地(株)が所有する*新宿園の建物を仮校舎として行われた。場所は新宿区番衆町(現在・東京厚生年金会館付近)。

谷保村の雑木林の中、校舎もまだ完成していない東京高等音楽学院に100人近い入学者があった。彼らを引き付けたのは、教員にそのころ最も活躍していた音楽家を揃えたことにあるといわれている。

当時の国立は東京商科大学(現・一橋大学)の移転による「国立大学町」を開発中で、その規模は100万坪にも及びドイツのゲッティンゲンにならった学園都市が計画されていた。

東京高等音楽学院が校地を国立に決めた理由は、学園都市として整備された環境と箱根土地(株)から提示された学校敷地を含む音楽村構想にあった。校地周辺の土

地の販売に学校が協力することで、仮校舎の提供、土地の無償譲渡、駅までの自動車提供など学校が種々の便益を受けるという条件があった。

この音楽村の構想は、当時の土地分譲のためのパンフレットによると「音楽家及び音楽愛好者のために」◇芸術による魂の浄化を標語として施設されたこの音楽村は、富嶽の雄姿、御嶽の連峰、箱根足柄の翠巒を背景として、宏壮華麗なる東京高等音楽学院の校舎を中心に、鬱蒼たる森林を繞らし文化的施設に加うるによく風致景勝の自然美を織り込んだのであります。◇従つてこの幽境に住はるる方々は、音楽を愛し芸術に憩い真に趣味を同じうせらるる方のみ資格を限るのであります。◇音楽家が最も困難を感じられるのは練習室の問題であります。広望一百万坪に亘る自然林を漏るる微かな音楽となつてそれも夢のように解かれましよう……」音楽村の広さは4万坪で、1区画150坪を160戸分譲の計画であった。

土地分譲に際しては資格審査員による詮衡があるなどまさに音楽の一大理想郷を作ろうとしていた。1926(大正15)年5月28日東京朝日新聞の朝刊に「日本唯一

の音楽村 東京高等音楽院「ママ」が国立村で明日地鎮祭」、5月29日の讀賣新聞朝刊に「東京高等音楽院「ママ」の音楽地鎮祭」と報道されている。従来の地鎮祭とは違った音楽地鎮祭が計画され、「国立大学町音楽村地鎮祭」が5月29日午後1時半から行われた。陸軍戸山学校軍楽隊と学院生の混声合唱によるハイドン作曲《天地創造》、混声合唱でウェーバー作曲《祈り》、クローツェル作曲《夕べの歌》が演奏された。当日は天候がすぐれず、交通不便な場所でありながらも盛会であった。

音楽村の開発は翌年12月末日までの期限であった。しかし、世の中が不景気のため、土地が売れず、音楽家のユートピアとなるはずの「国立大学町音楽村」は残念ながら完成されることはなかった。

参考資料

- * 渋川久子「東京高等音楽学院史の研究(1)」国立音楽大学研究紀要22(1987)(請求記号●PB102 22)
- * 「譜」時の調べにのせて 国立音楽大学の70年『国立音楽大学』1996(請求記号●C60-723)
- * 『国立音楽大学 演奏の80年史』東京高等音楽学院・国立音楽学校 時代1926年-1950年3月『国立音楽大学』2007(請求記号●J110-790)

* 新宿 園・新宿で箱根土地(株)が運営する娯楽施設。大正15年当時は閉園。
** 写真出典・『国立音楽大学 演奏の80年史』

● そめや かねこ 創立当初、国立駅前にはペリカンなどの水禽舎、通学路には熊や猿の小屋があった。のどかな国立。幻の音楽村。